

ラテックス凝集免疫比濁法を原理とするペプシノゲン測定試薬の基礎的検討

川口 敦志, 松本 篤, 松本 浩靖, 竹内 秀史, 栗本 誠一 (日本医学株式会社)

【はじめに】

ペプシノゲン (PG、PG) は、胃液中の酵素であるペプシンの不活性前駆物質であり、血中PG及び / 比の測定により、消化性潰瘍、胃癌、萎縮性胃炎などの胃粘膜の萎縮を伴う胃疾患の指標として有用である。今回、汎用自動分析装置で測定可能である「LZテスト栄研ペプシノゲン」の基礎的検討を行ったので報告する。

【装置・試薬】

装置：オリンパスAU5431型自動分析装置 試薬：LZテスト栄研ペプシノゲン (栄研化学株式会社) 対照試薬として、A試薬：イノテックペプシノゲン (株式会社三和化学研究所)、B試薬：アーキテクトペプシノゲン (アボットジャパン株式会社) を使用

【方法・結果】

同時再現性：血清2濃度について各20回連続測定を行い、PGのCVは0.39~1.21、PGのCVは0.98~1.99であった。直線性：高濃度試料を10段階希釈

後2重測定し、PGは200ng/mL、PGは100ng/mLまで良好な直線性が確認できた。共存物質の影響：干渉チェックAプラス、干渉チェックRFプラス、アスコルビン酸を用いて検討し、いずれの物質においてもほとんど影響は認められなかった。プロゾーン：高濃度試料 (PG 1000ng/mL、PG 500ng/mL) を段階希釈し、PG、PG共にプロゾーン現象は認められなかった。

相関性：50名の血清を用いて本法とラテックス凝集免疫比濁法であるA試薬ではPGで回帰式 $y=1.13x+2.7$ 、相関係数 $r=0.997$ PGで $y=1.39x+2.3$ $r=0.995$ また化学発光免疫測定法であるB試薬ではPGで $y=0.95x+0.6$ $r=0.994$ PGで $y=1.20x+1.4$ $r=0.996$ と良好な結果であった。

【まとめ】

今回行った、再現性、直線性、相関性等の基礎性能において特に問題はなく良好な結果であった。本法は日常検査において有用であると思われる。

連絡先：0724-26-3616